《天皇》とはなにか

――死・性愛・戦争――

田中希生
（奈良女子大学）

初めに戦争があった。戦争が恐怖のただ中に私を存在させる。この根源的状態にあって、《私》は無力で恐ろしい脅威を前に怯えている。身を守る術は？　ただひたすら身についた汚れを落とすことによって、超越論的還元ではなく神秘的還元によって。

ジュリア・クリステヴァ『恐怖の権力』

1．　天皇論の前提――いかに象徴天皇制論を超えるか？

✹　天皇制とはなにか――坂口安吾の呪縛

天皇制というものは日本歴史を貫く一つの制度ではあったけれども、天皇の尊厳というものは常に利用者の道具にすぎず、真に実在したためしはなかった。／藤原氏や将軍家にとって何がために天皇制が必要であったか。何が故に彼等自身が最高の主権を握らなかったか。それは彼等が自ら主権を握るよりも、天皇制が都合がよかったからで、彼等は自分自身が天下に号令するよりも、天皇に号令させ、自分が先ずまっさきにその号令に服従してみせることによって号令が更によく行きわたることを心得ていた。…／自分自らを神と称し絶対の尊厳を人民に要求することは不可能だ。だが、自分が天皇にぬかずくことによって天皇を神たらしめ、それを人民に押しつけることは可能なのである。そこで彼等は天皇の擁立を自分勝手にやりながら、天皇の前にぬかずき、自分がぬかずくことによって天皇の尊厳を人民に強要し、その尊厳を利用して号令していた。

坂口安吾「続堕落論」1946 年 12 月稿

天皇制研究の流れを最後に図式化してまとめておきましょう。…天皇（制）はなぜ律令制から幕末維新まで生き残ったかといえば、結局、天皇は国家の最終的な意思決定を確定される権威として支配を継続させえたからだとの見方になりますか。本質は不変だということでしょう。権力を持たない権威である天皇が、官位任免体大権を核とする権威によって幕末まで生き延びたというイメージでしょうか。

加藤陽子「天皇はいかに受け継がれたか」『週間読書人』2019 年 5 月 24 日

→　終戦直後の天皇不親政論（津田左右吉・和辻哲郎）の系譜。学者の天皇論は安吾から一歩も進まず。

→　研究者の天皇観は、津田や和辻、安吾を起点とする戦後の象徴天皇制の無意識の反映。

✹　特異な研究者たち

- **吉本隆明**（1924～2012）「共同幻想論」1968、「天皇および天皇制について」1969、「南島論」1970
- **網野善彦**（1928～2004）「無縁・公界・楽」1978、「異形の王権」1986
- **山口昌男**（1931～2013）「道化の民俗学」1975、「天皇制の文化人類学」1989

→　みな、終戦を学問形成期に迎える（彼らを天皇制研究に駆り立てる動機）。天皇の力が露呈していた時期。

2．　国家の外部――脱王権

✹　文献史学の病（点と線）

文献と歴史叙述の一対一対応を求めるあまり学者は文献から出てこなくなった（俗に「史料のないところに歴史なし」）。

→　しかし、天皇の歴史は文献を時間的にも空間的にも越えて存在。**天皇は天皇制の外にいる。**

✹　国家の外部（混沌――分析可能な）

人間は国家をつくる生物。死、孤独、戦いに対する不安・恐怖が、此岸に国家を作り上げる。国家は、死を遠ざけるべく宗教（神）を、孤独を遠ざけるべく家を、戦い（力）を遠ざけるべく警察と軍隊とをこしらえる。

自然	⇔	国家
（勇気にもとづく）	不安	（恐怖にもとづく）
死生	⇔	**宗教・道徳（善悪）**
孤独・性愛	⇔	**家・結婚（公私）**
力・戦争	⇔	**兵士・警察（正義・犯罪）**

✹　大嘗祭――農耕儀礼か？

・　前天皇から「天皇霊（てんのうれい）」を受け継ぐ儀式。折口信夫は「大嘗祭の本義」において、これを天孫降臨の再演と指摘。

・　ただし、「天皇霊」は文献上（敏達紀）、戦争との関連で出てくるもの。

【神祭次第（４日間）】

１１月卯日　悠紀殿儀（ゆきでんのぎ）・主基殿儀（すきでんのぎ）　①天の羽衣着脱（潔斎）　②薦享（せんこう）の儀（神饌親供）　③真床覆衾（まどこおふすま）での就寝（聖婚？）

辰日　辰日節会　悠紀帳（ゆきのちょう）中心の直会（神人共食）　／　巳日　巳日節会　主基帳（すきのちょう）中心の直会（神人共食）

午日　豊明節会（とよのあかりのせちえ）　①国栖舞（くずまい）　②久米舞（くめまい）　③吉志舞（きしまい）　④悠紀主基両国の風俗（くにぶり）歌舞　⑤五節舞（ごせちのまい）

→　悠紀国・主基国はかならず畿外に（前者は東、後者は西）設定される。大和朝廷勢力範囲の東端・西端を形成。

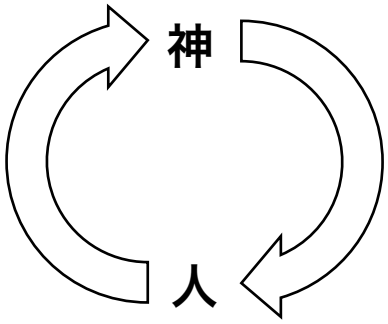
→　天皇霊は外部（外来魂）との接触・吸収により活性化、再生（新陳代謝）する。

→　国栖舞は神武東征に服した吉野の豪族が応神行幸の際に舞ったもの。また、久米舞・吉志舞ともに戦闘歌舞。

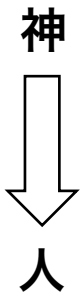
→　天孫降臨は戦争を示唆。ニニギはアマテラス・高御産巣日により戦場となっていた葦原中津国に送り込まれた。

→　大嘗祭は人間的自然である死生・性愛・戦争をなぞって展開。原始国家は人間的自然からたえず力を供給される。

✹　原始国家と国家――兄弟相続から直系相続へ



呪術的円環



宗教的線分

→ 「呪術的円環」: 社会は災厄と生成とをもたらす神の力にたえず晒されている。タブーは呪術者の科学。神が人に入り込むことも、人が神になることもある。交渉可能な神。時間は円環。**戦争は、この円環をもたらす重要な契機**。

→ 「宗教的線分」: 神人の距離に比例し一方は偉大に、他方は従属。結果として生じる神の遠ざけは社会を安定化。神の虚構化・道徳化・合理化が進む。蓄積的・年代記的時間概念が可能に。宿業（仏教）や血脈（儒教）を意味できる。

→ 「呪術的円環」は天武朝以前を、「宗教的線分」は天武朝以後・律令にもとづく支配を表現していると考えてよい。

3. 流浪の戴冠詩人――中世の天皇

✹ 宮廷（女房）文学の時代

直系相続を志向した天武朝は淳仁天皇（3世）で途絶え、平安時代に突入。血の問題はいかに解決されたのだろうか？

→ 無名の女房たちのもつ絶大な力の意味（女房奉書・宣旨・源氏物語・後鳥羽院）。それは神（＝主上（しゅじょう））の言葉を下々（＝衆生（しゅじょう））に一筋に伝える巫女の力を淵源とする。

→ 近世には歌を朝廷衰微の原因とし、源氏物語を淫乱の書と決めつけた後光明天皇のような存在があったが、近世は皇位継承が不安定な時代（女帝の立った時代）。

→ 文献史学は結局のところ皇統譜を信用することしかできない。歴史家は閨房を空想することが許されているか否か。Cf.『日本霊異記』における雄略天皇と少子部蜾蠃（ちいさこべのすがる）の記事。

→ 少なくともいえることは、平安期の宮廷は恋愛＝自然から、歌の形で絶大な力を得ていたということ。

✹ 院政から武士の時代へ～安徳以後

天皇生前に代送りの大嘗祭をおこなう院政は何を意味するのか？　ともあれ、天承2年（1132)、鳥羽院は平忠盛を殿上に招いた。恋愛のみならず、戦争をも取り込んだ宮廷は、もはや国家というより自然と呼ぶべきだったかもしれない。安徳の死は、王権のあり方を大きく変えた。善悪の彼岸で、この少年王は自然の力＝剣を抱いたまま海に眠る……。

自然	⇔	国家
（勇気にもとづく）		（恐怖にもとづく）
死生（院政）	**玉**	**王法・仏法（御成敗式目）**
孤独・恋愛（女房）	**鏡**	**家・結婚（北条得宗）**
戦士・戦争（武士）	**剣**	**兵士・警察（武家権門）**

→ 平安期にいたり、徐々に《自然》を内裏に引き入れ、天皇の周囲から国家形式が消失する傾向。

→ 後鳥羽院以後、王権の主体としての天皇は姿を消す。

→ 王権の構成要素としての天皇はわずかにその外郭に触れるにすぎない（官位任免体)。ただし、天皇は叙位任官の権威のゆえに存続した、という見方は世俗の権力者の、あるいは王権研究者の見方。

→ 中世における自然と国家の距離の増大、国家合理化の拡大は、自然と国家とを対立的なものに変える。
《北条氏・徳川家による統治の本質は自然の抑圧にある。》

→ 天皇は自然の側にあって、その力を背景に、世俗権力に対して反覆を窺う勢力として潜勢化・内在化。
《中・近世天皇の本質は反＝国家性にある。》

✹　革命の旗手／文学（自然の力をおのれのものにすること）

・　（天智天皇―乙巳の変／天武天皇―壬申の乱）

・　後鳥羽院―承久の乱……宝剣喪失　→①

・　後醍醐天皇―正中の変……「天皇御謀叛」　→②

・　明治天皇―戊辰戦争……統帥権奪還　→③

→　天皇は青天の霹靂のように登場し豪族と抗争を繰り広げ、勝敗に関わらずたちまち権力を失う。

→　海に沈んだ安徳以来、天皇はその本質を国家の外部に置く。政治的には、王権の回復を求めつつ（王政復古）、その不可能に直面する悲劇の物語の素材となる。

→　革命とは、復古を求めつつ、その不可能をむしろ新たな事態として肯定すること。再現（円環）から更新（螺旋）へ。

特異な事例としての大逆事件……幸徳秋水「獄中から三弁護人宛の陳弁書」

即ち私共が革命といふのは、甲の主権者が乙の主権者に代るとか、丙の優良な個人若くば党派が、丁の個人若くば党派に代つて、政権を握るといふのではなく、旧来の制度組織が朽廃衰弊の極、崩壊し去つて、新たな社会組織が起り来るの作用をいふので、社会進化の過程の大段落を表示する言葉です、故に厳正な意味に於ては、**革命は自然に起り来る者**で、一個人や一党派で起し得る者ではありません。

Cf. 田山花袋「近代の小説」

明治四十年から四十二三年にわたる間の自然主義運動の猛烈であつたことは、今更こゝにそれをくり返すまでもない。…後には政府の注意をも惹くやうになつて、不健全な、不道徳な、危険な思想であるやうに考へられて行つた。例のほんの芽であつた幸徳秋水等の社会運動とつゞいて行つてゐるやうにさへ思はれた。

4．　大東亜戦争――保田與重郎と小林秀雄

> 像花にあらざる時は夷狄にひとし。心花にあらざる時は鳥獣に類す。夷狄を出で、鳥獣を離れて、造化にしたがひ造化に帰れとなり。
>
> 松尾芭蕉『笈の小文』

✹　不安の時代――恐怖と勇気の狭間で

小林秀雄（1902～1983）……東京市神田区生。近代日本文芸評論の確立者。戦後は坂口安吾による「教祖」批判。

保田與重郎（1910～1981）……奈良県桜井市生。1935年創刊の『日本浪曼派』を主催。当時の青年層に絶大な影響を与えた。詩によって神国日本の戦争を賛美し、若者の玉砕を奨励し、死を美しい言葉で飾って事実の醜悪さを隠した。それは当時を知る戦後の若者たちにとっては、「奇怪な悪夢」であり「錯乱の記憶」であり「おぞましい神がかりの現象」（橋川文三）であり、あるいは「不気味な神話」（三島由紀夫）であり、「海中深く廃棄された放射性物質」（大岡信）であった。

→　昭和十年代という「不安の時代」。近代的な「知」に対する反抗。文学は反知性主義のよりどころとなった。「反知性主義の浸潤…典型的代表者を小林秀雄とすることは間違いでない」（橋川「日本浪曼派批判序説」）。

→　小林と保田はともにもっとも成功した「戦争イデオローグ」とされる。

✹　近代文学者の自然／革命観

【保田與重郎】「戴冠詩人の御一人者」1938 年

本居宣長は上代日本人の「自然観」を明らかにすることに生涯を費やした。〔富士谷（ふじたに）〕御杖（みつえ）がその見解に反対し、如何にも粗放めかしいところを訂正した。…**「自然」を具体的に云へば、同殿共床である。**

→　神武以前の世界を言霊（ことだま）とみる御杖の世界観（⇔神武以前をすべて現実とみなした宣長の「直毘霊（なおびのみたま）」）。
→　「自然＝同殿共床」とは、神武期の人々の憧憬。保田にとって、自然とはひとつの理想。

日本は今未曾有の偉大な時期に臨んでゐる。**それは伝統と変革が共存し同一である稀有の瞬間である**。日本は古の父祖の神話を新しい現前の実在とし有史の理念をその世界史的結構に於て表現しつゝ行為し始めたのである。…戦争は一箇の叙事詩である。恋愛は叙事詩でなく抒情詩の一つである。この時期に我らは物語小説と詩文学を区別する。今は英雄が各個人の心に甦り、個人が国民と英雄を意識し、己の中にみいだす日である。英雄とは歴史の抒情に他ならない、人間の抒情がまさに詩人であつたやうに、意志と精神の決意は一つの抒情を歌ひあげる。

→　自然的抒情（韻文）と英雄的叙事（散文）の弁証法抜きの統合、あるいは伝統と変革のつくる円環。

【小林秀雄】「文学と自分」1940 年

文学者が文章といふものを大切にするといふ意味は、考える事と書く事との間に何んの区別もないと信ずる、そういふ意味なのであります。…海とか空とかいふ言葉は、悟性の約束による記号ではない、海や空といふ実物に繋り、海の匂いも空の色も映してゐる。善とか悪とかいふ意味だけで出来てゐる様な言葉にしても、文学者は、長い人間の歴史の脂や汗に塗れているそういふ言葉の形をしかと感じてゐるのであつて、歴史の脂や汗を拭い去つて了つたら言葉はもはや言葉ではなくなる、それはただ推理の具と化するのであります。…**文学者の覚悟とは、自分を支へてゐるものは、まさしく自然であり、或は歴史とか伝統とか呼ぶ第二の自然であつて、自然を宰領するとみえるどの様な観念でも思想でもないといふ徹底した自覚に他らならぬ**事がお解りだらうと思ふ。これは一方から言へば自然や歴史を心を虚しくして受容する覚悟とも言へるのである。

→　自然をひとは受け容れることしかできない。言葉に対しても文学者は同じ態度で向き合う（直毘霊）。

僕らには歴史を模倣する事以外には何も出来る筈はない。刻々に変る歴史の流れを、虚心に受け納れて、その歴史のなかに己れの顔を見るといふのが正しいのである。日本の歴史が今こんな形になつて皆が大変心配してゐる。さういふ時、果して日本は正義の戦をしてゐるのかといふ様な考へを抱く者は歴史について何も知らぬ人であります。歴史を審判する歴史から離れた正義とは一体何んですか。空想の生んだ鬼であります。(「文学と自分」)

→　戦争は道徳を超えた場所にある。聖戦や国体などというイデオロギーは、自然の前では無意味。
→　小林は敗北によっても失われない過酷な自然を、国民のうちに見定めようとしている（善悪の彼岸）。

国民は黙つて事変に処した。…事に当つて適確有効に処してゐるこの国民の智慧は、未だ新しい思想表現をとるに至つてゐないのである。何故かといふと、さういふ智慧は、事変の新しさ、困難さに全身を以て即してゐて、思ひ附きの表現など取る暇がないからだ。この智慧を現代の諸風景のうちに嗅ぎ分ける仕事が、批評家としての僕には快い。あとは皆んな

詰らぬ。（小林「疑惑Ⅱ」1939 年）

→ 保田の絶唱と小林の沈黙、一見正反対にみえても、その差は微妙なもの。いずれも、文学者の覚悟が見出した、国家（文化）的なものを影で支え、ときに活力を与え、ときに破壊する自然＝歴史あってのもの。

→ インテリゲンチャの喧騒の背後で、国民が沈黙のうちに実践する無意識の戦争（事変）にまで、天皇が根を下ろしているとしたら？　――いっときの敗北で失われるようなものではけっしてない。

→ 吉本の《南島》、網野の《無縁》、山口の《混沌》。不思議にそこに見え隠れする天皇の影。

Cf. 吉本隆明「天皇および天皇制について」

すくなくとも現在の古典研究の水準だけからいっても、わたしたちは〈日本人〉的という概念を、歴史的な〈天皇（制）〉以前にさかのぼって成立させることができる。…そしてこの段階は南島をはじめわが列島の各地にちらばっている土俗的な宗教と文化にその実体をもとめることができる。

→ 時代の変革のために呼び出される人間的・原始的自然としての《天皇》。近代国家そのものへの反乱。

5．　結論

自然の循環を運命として受けいれざるをえない、脆弱な王権を構成する諸主体の中心的存在だった上代の天皇は、必然的に、自然の猛威に身をさらす危険を冒さねばならず、その意味で逆説的に王権の外部にも、自然史的かつ神的な足場をもっていた。それが死・性愛・戦争である。天皇は自然に対する交渉役にして防波堤であり、死・性愛・戦争によって国家の代謝を促す時を告げる者でもあった。血の繁栄は、高天原から葦原中国に流された私生児 Natural Son の一族としてのものであり、問題は血よりも自然との交渉役として聖性を独占することにあった。

最初の転機は天武・持統朝にある。この時代を契機に王権は次第に大陸的な、折り目正しき人間身体を備えるようになった。神々との対話のため、十重二十重にタブーに絡みつかれた天皇の力は、自然と国家とのあいだの距離の拡大によって、王権を構成する一要素として形式化していく傾向をもった。

しかし、それはあくまで形式上の話である。実態は異なる。国家形式の影で宮廷に密輸入されていた、世界的にも特異な女房文学は、国家の内部に恋愛の力を引きいれていたし、のちには武士をさえ殿上に招きいれるようになった。要するに、否定さるべき上代の姿、自然の力が秘密裏に導入されていたのである。

中世、とりわけ安徳から後鳥羽院を経て、天皇は王権においては形式以外の力を喪失する。それはかえって、潜在的には天皇の本質を強調する結果を招いた。本質とは、国家の外部にあって、死や性愛、戦争という自然＝神々の力を備給しながら、共同体に亀裂を走らせて消え去る稲妻である。この一族は、世俗権力に対する反国家的な一族として、青天の霹靂のごとき鉄槌をくだす機会を、ことあるごとにうかがっていたようにみえる。すなわち、大嘗祭が儀礼的に再現しようとした死と再生のドラマを、現実の歴史において反復しようとするのである。

後鳥羽院以来、敗者の系譜は昭和天皇にまで連なる。たとえ明治天皇が天智・天武以来の革命に成功したとしても、しょせんは古い一族であって、不可避的に新しさを求める世俗の統治においてはたちまち権力を失っていく、それはいつの世も同じである。たとえ日本的自然の抱いた八紘一宇の夢が夢のまま終わったとしても、大東亜戦争は自国も含めた〝近代国家〟なるものに対する「謀反」だったといっていい。

天皇制はなぜ存続したかという問いは、王権の主体として天皇が考えられているかぎり、その本質から離れたものだ。天皇の本質は、表立っては持続よりも切断にある。天皇は本質的に原始人である。彼らの表舞台への登壇は、革命の、不吉な、そして麗しき予兆である。日本の歴史は、むしろ天皇を王権から排除ないし揚棄していく歴史であり、王権が衰弱したときにこそ、天皇はその真の姿をあらわす―善悪の彼岸から、破壊と再生の使者として。